〈調査報告〉

国頭村奥むらの戦争体験（２）

宮城　能彦

要　約

本稿は沖縄県国頭村奥集落の人々の戦争体験の聞き取り調査（第２回）の記録である。戦争体験を語ってくださった方は、全て国頭村奥の出身者ではあるが、徴用され兵庫県で旋盤工として働いた女性や、１４歳で農兵隊に入隊させられた男性、５歳でサイパンへ移民した後に従軍しサイパンが玉砕したために故郷音奥に帰ってきて戦後の復興に寄与した男性など様々である。本稿は、奥という沖縄本島北端の集落から見た沖縄戦を、ライフヒストリーとして記録することによって、沖縄戦を様々な角度から考えようとするものである。

キーワード：沖縄戦、オーラルヒストリー、国頭村奥、サイパン、戦後復興

はじめに

本稿は、沖縄県国頭村奥集落の人々の戦争体験の聞き取り調査（第２回）の記録である。聞き取りは、2011年２月11日に国頭村奥の奥民俗資料館にて、筆者および元奥区長で「奥のあゆみ」を編纂した島田隆久氏が質問するという形式で、記録はボイスレコーダーによる録音およびビデオ撮影によって行った。（奥は筆者と同じ宮城姓が多いため筆者の質問は（能彦）とした。）

文字起こしはおよび編集は宮城が行い、地名や人名の表記については島田氏に確認してもらった。インタビューはその後、３月12日にも行った。

沖縄本島北部地域において激しい戦闘が行われることはなかった。しかし、沖縄戦中住民は山へ避難し、警防団を組織して米軍の動きを監視しつつ厳しい生活を強いられていた。また、奥在住、または奥出身者で、奥において戦争を経験した方だけでなく、兵庫県や大阪へ徴用された人、移民先のサイパンで徴兵され戦後奥に帰ってきた人など様々である。本稿は、奥という沖縄本島北端の集落から見た沖縄戦を、ライフヒストリーとして記録することによって、沖縄戦を様々な角度から考えようとするものであが、今回は紙数の関係で、伊丹製絨所で働いた後に帰沖し戦争中は山の中で女手ひとつで子どもたちを守った与那城ヤス氏と、戦後サイパンから沖縄に引き上げて、奥の戦後復興に多大な寄与をした宮城親順氏を収録した。

１．女ひとりで祖母と子ども２人の食糧確保

与那城ヤス（大正五年二月二十日）

（島田）おばあは若いときから働き者でタコ取り名人でタコ採って娘二人を琉大行かせてます。女一人で。

（与那城）戦争反対してくださいよ先生。こっちは哀ればかりさせてから、ほんとよー。
奥で生まれ育って、高等科二年まで学校を出た後にすぐ内地に働きに行きました。親の助けさ、妹や弟たちの着物を送ったりしてね。たくさんの子どもがいたから。兄妹たくさんいたからね
（宮城）どちらにいかれたのですか？
（与那城）伊丹製絨所（せいじゅうしょ）って言ったんだよ。紡績じゃない。
（宮城）学校を卒業してすぐ製絨所へ？
（与那城）みんなそう、親助け。あのときの船賃はね、那覇から大阪まで１０円。大変なお金だったんですよ１０円というお金は。
（宮城）これはどうやって用意したのですか？工場から借りてですか？自分で？
（与那城）家からも出すけど。
（宮城）後で払うっていう？
（与那城）親が作って持たせたはずよ。私なんかにはわからない。製絨所には奥の先輩もたくさんいました。
（宮城）毎日工場では朝からずっと？
（与那城）いや８時間勤務。朝は５時から２時まで。夜間の人と交代するわけよ。また２時から交代して１１時まで二交代。昔は結核になる人が多かったから。昔は朝から晩までだったけど、それで体弱って結核になりよったから、それがあるから二交代になりました。
昔は朝から晩まで。だから奥の人も結核でたくさん亡くなったよ。私なんかが子どものときにもね。食べるのを食べないからね。
（宮城）ずっと向こうで働いて・・その時の楽しみはありましたか？
（与那城）そりゃありますよ。映画もあるでしょう。見に行ったり。
（宮城）誰か一緒でした？船に乗ったのは。
（与那城）一人では行かないでしょう。みんなで何人かで。
（宮城）伊丹製絨所にはどれくらいいたのですか？
（与那城）私は５年くらいいましたよ。たいてい皆行ってるはずですよ。
（宮城）時々あっちの生活のほうが楽しかったという人もいますけれど、どうなのですか？やっぱりきつかったですか？
（与那城）さあ・・なんといっても私なんか哀れしにばかりこの世に生まれてきたんだから。戦争のために。
（宮城）あっちに５年いて沖縄に戻ってきてから戦争になったのですよね？
（与那城）子どもできてからさね。戦争はじまったときはもう奥で結婚して子ども育てながらでした。
（宮城）奥に戻ってこられたのが昭和の何年くらいになりますか？
（与那城）１３年。１３年に帰ってきたらね。主人は、昭和十四年には招集されて、１４年、１５年・・・。１８年に帰って来て、１９年にまた護郷隊に徴兵されて。戦争がなかったらその恩給で食ってもいけよったわけさ。
（島田）与那城隊長が戦争で亡くなった時のことは信アンメーが書いています。
（宮城）もうほとんど旦那さんと一緒に生活してないんですね。
（与那城）二か年。１８年に帰ってきてから　１９年に沖縄戦に連れられてね。次女がすぐ生まれて。それからもう、あわればっかり。だから先生、戦争に反対してくださいよと言うんですよ。あんまりあわればかりしてきたから。
（宮城）そのためにこうやって記録をちゃんと残そうと思っています。

（与那城）大変ですよ、もう。運が悪いといったら悪いですね。今の子どもたちは絶対わからないです。戦争のことなんか
（宮城）戦争中はで山に逃げていますよね、どこの山ですか？
（与那城）カイチ。
（島田）そこに実家の土地があったからね。
（宮城）カイチに子どもと一緒に逃げて。
（与那城）主人のおかあさんも、３名。
（宮城）もちろん山の中で相当苦労なされて・・・。
（与那城）男がおる人は男がみるけどね。
（島田）避難小屋はむこうのお父さんでなくて、全部みんなで協力してつくったって。
（宮城）食べ物はどうやって食べたのですか避難小屋にいるときは？
（与那城）奥の人はそんなにまでねー、食べ物には苦労していないですよ。夜はまた取りに行くしね、乾麺ぽうを。私なんかはお婆さんがいるから、まだ良かったさね。女の子二人あずかってくれるから。でも、そうでない人は、子どもをほったからしにして行き寄ったはずねーと、今でもかわいそうだねーと思いますよ。こどもだけを山において食糧を取りに行きよったはずねって思ったらね。私なんかでもかわいそうだねーと思いますよ。
（宮城）女の人が船から乾麺麭（かんめんぽう）を取りに行くのは大変だったのではないですか？道も険しいし。
（与那城）奥の人は男勝りだのに（笑）。
（島田）男女関係ない。むしろ女の方がじょうず。生きないといけないから。
（与那城）ほんとうですよ。男の人の仕事も女の人の仕事も同じ。何とも言われないね。（酒は）飲まんかったけど。どこからお金もってくるね。
（宮城）戦争終わって山からおりるときは覚えていらっしゃいます？
（与那城）一番かわいそうだのはね子どもたち。あんな子どもだのに山からもう・・・。
この食糧がなくなったら子どもたちはどうやって生きるんかねーと思う心があるからね。今の人は持ちきれないよ。あんなたくさんの荷物。絶対に。お米も、自分と子どもとおばあの着物を私が持って。ゆっぱ浜を、うちのひさこ（長女）にきょうこ（次女）をおんぶさせて、しーなーまで、あんな砂がある浜を歩かせて。あれは今でもかわいそうだねーと思う。
おばあもね、味噌とお茶とあれだけしか年寄りは持ちきれないさね。だから、ひさこにおんぶさせて　きょうこを。あんな子どもを、しーなーまで。あれかわいそうだねーと思う。涙ながれるよ。喜如嘉に行ったらね。（ひさこが）疲れていると思ったから、私が先に行ってまず荷物を置いて、それから戻ってきょうこをおんぶして。ひさこは歩かせて。あんな暮らしだったんだから。男がおる家は男が面倒みたけど、私なんかはあわれしたんですよ。ひさこは昭和１４年１月６日生まれ（当時６歳）。きょうこは１８年１２月２０日生まれ（当時２歳）
（島田）はじめて聞くね。六歳のお姉さんが２歳の子どもをおんぶしていたわけね・・・。
（与那城）あれ考えたらほんとに許されないよ私なんか。今でも。私なんかが荷物いくら持とうとしても、こんなに体がちっちゃいものだからね。でも、昔の人は意地があるから力はありましたよ。わたしなんかは喜如嘉だった。アメリカさんの車で。辺土岬に陣地があったから。
（宮城）アメリカ人を見たのはこのときが初めてですか？
（与那城）そうよ。戦争中は山で隠れているから見るはずないでしょう。
（宮城）どう思いましたか？
（与那城）どうといってもみんな一緒だから、ねー。

（島田）私はその時小学校二年生だから。非常に若いなあーというのと、目の色が違うというのが印象的でした。恐いというのはなかった。対応が優しかったから。
（宮城）僕の母親もやんばるなんですけど、戦争中はじめてアメリカ人を見た時に、やぎと思ったって、白いやぎと黒いやぎ（笑）。最初喜如嘉にも４人で？おばあちゃんと娘２人と。泊まったのはどちらの人の屋敷ですか？
（与那城）金城といったね。楚州の人も一緒にね。奥の人は、トヨさん、みーどー・・・・・・たんぼ植えるのに一緒にやったから。喜如嘉には奥の人はあんまりはおらなかったね。
（宮城）奥の人が少なくて、心配ではなかったですか？
（与那城）いえ。ごはんも配給がありましたから。自分なんかは米を持って行ったからね。食糧を持つために子どもにあんな哀れさせたんだから。食糧はそんな困らなかったですね
　その後、謝敷に行って、そこから奥にきて。ウンニーという所に。ちょっと入ったよね、あんまりではないけど。
　奥に戻ってきてからは、実家が残っていたから。旦那の家は燃えたから実家で。自分の親も元気でいてそこでしばらくいて。一年くらいみんなで、共同作業で家を葺いて。
（宮城）どうやって生活していたのですか？食べ物は。
（与那城）あんまり奥は食べ物はねー困らない。あの時分は。配給もあったから。芋だけは畑にあったから。滝の上に籾を保管してあったからね。雨の日もそれを取りに行って。それがあったからお父さんの焼香もできたわけよ。籾をおかゆにしたから、そんなにまでは食べ物には困らなかった、困った人もあるはずだけど。
（宮城）戦争中に一番きつかったのはなんですか？
（与那城）やっぱり、子ども達がいましたからね。食糧取りに行く時でも、もしも自分が死んだらこどもたちも死ぬんだというのが恐かったですね。
もしも自分が敵にあって死んだら、子どもも死ぬのはあたりまえでしょう。これは恐かったですね。そんなこと思わない人もおるかもしれないけど、私は思いましたね。私が３人をみているんだから、私が死んだら３人を誰が見る人おりますか。あれだけは恐かったですね。
（宮城）子どもを育てるために一生懸命頑張ったのですね。
（与那城）ああ、もう、どんな苦労しましたから。泣いても泣ききれないくらい。男の人がいるところは男の人がみてくれるからなんの心配もないさね。私なんかは大変であったわけさ。
（宮城）戦後はどうやって生活してきたのですか？
（与那城）そんな困らなかったですよ。山も行くしね。炭運搬でね、そして、海でタコ採り。
山より海から儲け寄ったね。あの時またよーけいタコがおったから。
注文もありましたよ。海に行かない人もおるでしょう。店にはないから。正月になったらお祝いもするし。注文もあったし。奥はその頃人口も多かったし。行かない人もおるでしょう。行っても誰でもとれるわけではないでしょう。
（島田）こればかりは、誰でも採れるというという訳ではないから。特殊な能力のある人しか採れないから（笑）。
（宮城）いつ覚えたのですか？どこで。
（与那城）いつといっても、わかりますか（笑）。子どものときからね。おばあが上手だった。海ちゅやし。ていぼうのおかあさん。おばあさんに似てたんだはずよ。だから上手だはず。うちのお母さんなんかは絶対できない。昼なんか行く暇ないよ。昼は山、夜は海。夜も昼も一日中働いていました。だから、戦争なんか反対するんですよ。戦争のためにこんなあわれしてるんですから。主人おったらこんなにはならなかった。

（島田）奥の男で一番重要な仕事は、斧で木を削るということだったんだけど、この人の旦那さんが一番上手だったわけ。木を角材にするのに昔は斧でやる。それが上手かどうかは、削った跡をみればわかるわけ。これをやりきらないと飯食いきれなかった。
（宮城）記録をちゃんと残して、二度と戦争しないように若い人に教えないといけないですね。
（与那城）今の若い人たちは農業さえもしないのにわかるかね。

４．サイパンで従軍、戦後奥で発電所を建設

宮城親順（大正十四年八月五日生）

（親順）僕は５歳の時にサイパンに行きました。おやじがその二、三か年前に行って基礎を築いて、それから兄貴が行って、それからぼくら、姉とお母さんと３名行っているわけ。その時が５歳。それから１５のときにパラオの水産試験場の船に乗りました。昭和１５年に。そして、１６年の８月９月頃だったですかね、セレベスの無人島に派遣されました。当時は僕ら意味がわからなかったけど、後で考えるとやっぱり一つのスパイ行為だね。傍聴。そして、昭和１６年の１２月８日、真珠湾攻撃する時に僕らの船に無電が入って。無人島で無電の監視をしておったわけ。そしてパラオに逃げてきた。だから大東亜戦争の真珠湾攻撃のときから僕は関わっているわけ。それで、転々といろんな御用船乗ったりして、ダバオで野戦病院に入院したりしたんだけど　それでも何とか復活して、船に乗って、最後には神戸港に行きました。その時にはもう日本国外には出られない状態だった。昭和１９年かな２０年。神戸港で空襲にやられて負傷してそれでまた二か年入院して沖縄に帰ってきたわけです。それが僕の経歴です。
（能彦）終戦迎えられたのは？
（親順）神戸です、沖縄への帰還は神戸から。
ふりかえってみると、僕はどこの人間であるかという意識がなかったわけですよ、それまでは。だけど、ぼくは本籍地は沖縄だから、もうどうせ仕事も出来ないし、貫通のあとが体に３カ所あるからね。それでしかたがないから、帰るところはもう本籍地と決めたのです。帰ったら親戚なんかがいるんじゃないかって言われて。それで沖縄帰還第一便で帰ってきたわけさ。
（能彦）神戸から第一便で
（親順）はい。それから帰ってきてから奥の復興関係の仕事をしました。エンジニアだったから関われることもあったわけですよ。昭和１９年７月にサイパンは玉砕。現住所はサイパンだったから、それで僕は大牟田で徴兵検査されて甲種で受かって、佐世保に入隊したんです。御用船の船員が少なくなっていたので、とうとうずっと最後まで御用船乗せられていたんですよ
だから沖縄に帰ってくるときは僕一人帰って来ました。ところが、お母さんと妹が玉砕したはずのサイパンから沖縄に帰ってきて再会できました。家族のうち５名はサイパンで玉砕。
（能彦）有名なサイパンの玉砕の犠牲者？
（親順）そうです。だからサイパンの僕の屋敷の跡の写真があります。（写真を取り出す）
これは去年撮りました。それまで何回も行って屋敷探し出して。これ（製糖工場）だけは無傷なんですよ。サイパンの経済に貢献したとうことで現地の人間が傷つけてないので。
（島田）平和の礎に記名されているのは５名？お父さんと？
（親順）５名載っています。親父が亡くなったのは戦前だったから載ってないです。うちの兄貴、奥さん、子ども２人、それからうちの姉の５名です。
　姉の消息もこないだようやく分かりました。最後は手足をけがして。恋人がいたらしいです。その人が背負っていたんだが、どうしようもなくなってそのまま置いたっていうのです。恋も

しないで死んだっていったらあれですけどね、そういう恋人もいたってことで、まあ一安心しました。
（能彦）５歳というとその前の記憶はあまり？
（親順）少ししかない。奥のタッチューのメイトウイシがあるでしょ？墓場の前だったかね？それくらいしか覚えてないです。帰還する時に、それを見て「ああここは奥だ」ってわかった。まだちょっとだか記憶にあったわけです。
（能彦）５歳でサイパンに行かれて向こうで学校は、日本人の学校？国民学校ですか？
（親順）一緒です、普通です。ただ、他府県の人間も一緒でした。だから何県とかあっちこっちから来ていたので、自分の故郷はどこかと考えた記憶はあんまりなかったです。だから、終戦になって、これからどこへ行こうかと、ふと振り返ったら、現住所はサイパンだし、玉砕しているし。さあどこ行くか考えた時に、本籍地いうのがあったから、そこへ行けば誰かいるんじゃないかって思ったから帰ってきたんですよ。その時はまだ妹とお母さんが沖縄に帰って来てるとは思わなくて、みな玉砕していると思っていたから。
（島田）おばあは別々だった？まったくの偶然ですね。
（親順）僕はずっと水産試験場の仕事で終戦まで船だから生き残ることができ、戦後帰ってきた。お母さんたちはサイパンで生き残って終戦後沖縄に戻ってきた。だからいろいろと体験しわけですよ、避難とかね。だからほとんど毎年行くんですよ、サイパンの慰霊祭に。子どもは一歳でしたが収容所で息をひきとったから、内緒で火葬してね女の子一人だけ。遺骨はお母さんが持ってきました。
（島田）お父さん、お母さんはさとうきびをを作っていたんですか？サイパンで。
（親順）いや最初はとうもろこしを作っていました。半年後くらいにコーヒー農園に移って。
（能彦）コーヒー農園を自分たちでやっておられたのですか？雇われて？
（親順）いえ自分でやっていました。その当時は国策として、食料・物資を入れるために海外に移民させてね。コーヒーとかパパイヤの乾燥したものとか、いろんなものを作りました。いわば日本の経済のために皆頑張ったんですよ、移民は。終戦になってからは何の音沙汰もないですけどね。だから我々は毎年慰霊祭行きますが、金のある人間は行けるけども金のない人間は行けないわけです、生きたくても。そういう問題くらい国がね、せめて半分くらい負担してもってもいいと思うけど。たまにぼくそういうこと言うんだけど、何のための国家だったということだね。日本のこれからが思いやられるわけです。実際、国民のための国家じゃないとね。政党のための国家じゃない。だからそういうことを学識ある人間はやっていかんと。
（能彦）ほんとうに、そうですね。
（島田）この方々が帰ってきて奥むらにどういう貢献したかを説明しましょうね。
　終戦直後はエンジンのことを分かる人は奥にいない。たまたまこの先輩が南洋で船を操っていたから、戦後２０代の若さで、アメリカが持っているエンジンを奥に持ってきてたり、あるいは与論島沖で座礁している台湾の蒋介石軍の船からエンジンを持ってきたりして、船のエンジンや発電所をつくった。奥が戦後一番復興が早かったのは、こういう機械を知っている方がいたからです。発電など新しい文化の花が咲くのはどこよりも奥が早かった。若干２０代の若い人たちが協力したおかげでどのムラよりも経済的テイクオフがあった。そうやって奥は栄えたわけですよ。
（親順）やっぱり、みな協力してそれぞれの分野で分担したので奥の復興は早かったです。不自由しないようと頑張ったんですね電気にしても。
奥に帰って来たら、平安座にアメリカエンジンの捨て場があると聞ききました。僕は水産庁に

いた時にエンジンの基礎勉強したもんだから、アメリカのエンジンでも見たらすぐ理解できました。分解して持ってきて、ここで組んで「奥丸」という共同店の船を建造してね。奥の松で建造しました。エンジンを僕らが整備したのを載っけて。それで奥の船が再開したわけです。

今考えれば、その当時の人間で、証人としては僕らくらいしか残っていないわけですよね。僕らが記憶のあるうちに、みんながどれだけ苦労してどれだけの功績をあげたかということを記録しておかないと誰もわからなくなってしまうよと僕らは話しているんです。実際の真相はね今のうちに記録取っていかないとと思って。歴史だけは正直にやってもらわんとね。歴史の改ざんとか時々言われるけど、ほんとうに、尽くした人間、死んだ人間が載ってない状態じゃあ死んだ人間が浮かばれないですよ。ほんとうに努力した人間が。当時、だれが実際に協力し難儀したかということは僕らにはわかるから、僕らが生きているうちに記録しなさいと言われるけど、僕らからは言える問題じゃないからね。聞かれてはじめて「こうだった」ってこと言えるわけです。でも、自分史でも作って出そうかと思っているところです。

（能彦）それは是非お願いしたいです。

（親順）偶然パラオ帰還者会長の田中という人が慰霊祭のためアンガールに行くって言うから、おじさん、おばさんが戦死してるから写真でもいいから撮ってきてって言ったらビデオでも撮ってきてくれました。翁長さんの自分史を見たら、水産試験場にいたときの写真があって僕が写ってるわけ昭和１７年の。もっと早くこの写真を見つけていれば戦前水産試験場で働いていたことが一発で証明できたのに。年金受け取りのためにそれを証明するのにずいぶんと苦労しましたから。この翁長さんもパラオから帰って、相当貢献してるわけ沖縄に。こういう人は自分史作ってるからいいけど、ほかにも貢献した人がいっぱいいるわけ。掘り起こして記録に残さんと。

（能彦）『奥のあゆみ』の発電所の話とか、座礁した船からエンジン取ってきて発電所作る話などにすごい感動しました。

（親順）あのいきさつはね。小さい発電機とかは最初からあって、お祝いの時とか臨時に電気をつけていたけどね。僕らは、奥部落全体に電気をつけないといけないと思っていました。ではどうしたらいいかという時に、平安座島にエンジンがたくさん（捨てて）あるとか、発電機はどこにあるとかを聞いたのです。発電機はせいじろうさんという人かが持ってきました。エンジンは僕がやるからと言って、持ってきて組み立てて発電したわけです。いろんな機材とか、与論沖の座礁船とか使えるものは全部使って。それが一番最初の発電機です。たかが電気がついただけというかもしれないけど、裏では相当苦労してるわけだからね。僕も２０歳のときからエンジンの勉強してきたから、アメリカエンジンでもすぐわかりました。部落にも、そういう復興に協力する人がたくさんいました。そういう協力者は現在ではほとんどもう亡くなってしまっていない。その当時は画期的なものだったわけですよ、電気つくるって。

（能彦）一つの集落で発電所つくるなんて想像もできないくらいすごいことですよ。

（親順）売店主任だったあんしんさんが与論沖の座礁船からエンジン取りに行くというのだが、部落の了解とってこないとダメっていって言われて。じゃあ、僕に一人技術者つけるなら行ってもいいかって言いました。パラオ帰りのすすむさんはエンジンのこと少しわかるということで本人もオーケーしたから。彼に水筒いっぱいの酒をあげてしかして、それで与論に行ってエンジンをみんな持って来ました。

（能彦）エンジン取りに行くときは命がけという感じでしたか？

（親順）いえもともと船乗りだから船に関しては大丈夫でした。あの時に船に関して他に知識ある人いないわけですよ。３千トン４千トン級だからね。それが座礁して陸に揚がってるような状態だがら、上がりきれないわけですよ。僕はロープひっかけてからロープ１本でずっとあ

がって、エンジンや必要なものを全部おろしてもってきました。そのエンジンで、僕らは「奥丸」や製材・精米所とかを動かしたわけです。だから、今考えれば部落に相当貢献しているんじゃないかと思うけど

（能彦）今の人は、逆にそうことできないですよ

（親順）だからまあ、我々戦争から帰ってきて、やっぱりなんか不満というのか、やっぱり自責の念というのもあって、なんかもういろいろ複雑だったわけですよ。我々の時代に戦争おこして負けたし。トップばかりを責めるわけにもいかないし、我々も参加したしね。複雑な気持ちなわけですよ。せめて故郷くらい復興させようと、それで力が入ったんでしょね。まあもうほんと放心状態でした。だから、今の人間には理解できないでしょうね。

（能彦）今の人間にはそれだけのエネルギーもないですからね。戦争中は大東亜共和圏つくってとか理想にもえていたのですか？

（親順）そうですね、まあ日本の教育の力だったんでしょうね。僕らも相当コワイ目に遭いました。輸送船団組んでますが、片っ端から轟沈させられて。ダバオでも野戦病院で３ヶ月入院したんだけど、帰ってきてまた船に乗って、２回目またやられて。その時は貫通も３カ所あったし、他にも大けがは五、六か所あるからね。それでも急所はやられてないから生きているわけです。

（能彦）当時は相当な体力あったのですか？

（親順）なくてもあったふりしとかんとね（笑）。気力だけは十分あると思うけど。今でも機械屋だから旋盤工作機械まわして機械作っています。まだ現役です。引退してないですよ。

（能彦）技術系の方は見方が違いますよね。現実的というか、きちんと事実をふまえている。

（親順）技術はやっぱり確実性を追求するわけだからね。「だろう」とかじゃ通らんわけですよ。「である」というところまでもっていかないといけない。

（能彦）電気がつくかつかないか。「つくかもしれない」じゃダメなのですね。ぼくらが非常に尊敬するのは、故郷に何か貢献しないといけないっていう、そういう思いですね。

（親順）貢献というのと、ぼくも機械関係だし・・・。辺土バルの部隊があったんですよ。嘉手納の基地が。そこでエンジンが故障して、部落からエンジニア派遣という要請がありました。部落にアメリカエンジン知っている者がいないから、結局僕にまわってきて。それで条件つけて行きました。エンジンの部品とかガソリンとか燃料を奥部落に補給してくれるんだったら、ぼくが行ってやりましょうと。アメリカ軍としては、ドラム缶をそのまま譲るわけにはいかないから、（ドラム缶の）半分だけ使って、そのままそれを捨て場に運びました。それらを奥から派遣された婦人連中がやってきてガソリンを抜いて奥に運ぶというのをやったことありますよ。だからそこらへんも機械やっただけじゃわからない。エンジンあっても燃料を補給し回さないと意味ないからね。だから、その補給のために、３回くらいエンジン修理で米軍基地に入りました。そういうことは誰もわからない。

（島田）この話は私も初めて聞きました。

（親順）肝心な問題。そういう運営関係やらんとね、機械だけ処置しても意味ないわけだから。そういう状況だから僕は米軍基地に行ったんだけど、それも誰もわからんわけです。

（能彦）アジアとかアフリカに機械援助するけど、ガソリンがなくなってしまって動かないとか、一回壊れたら終わりとかいう話をたまに聞きますね。

（親順）はい、そういう状態じゃまずいから、そういう条件つけて行ったことあるわけです。小さいことかもしれないけど、知ってもらいたい。そういうのがないと動かないですからね。一回だけならいいけど。結局は作った人にまた戻ってくるからね、エンジン組んだ以上は動く

のが当たり前とうことだから他の人間は。
（能彦）奥の発電所の話は世界中に誇れる話だと思います。
（島田）誇れますよ。現在の国頭村が自分で２０トンの船作りきれるか？　絶対にできないですよ。
（親順）陸で船を組立てるわけだが、１トン２トンあるエンジンをどうやって船に積むかという問題ひとつ当時の状況からすれば考えられないわけですよね。おかげで僕はやりかたわかっているからよかったんです。木材組ませて、チェーンブロック使ってやれば出来るんですよ。
（島田）重機がない時代に自分たちで機材つくって。
（親順）今考えれば簡単だけどさ。よく２１、２のときにやったなって思います。船の専門知識もっていたおかげですね。
（能彦）今、誰も信じないですよ。かつて一つの部落で、自分たちだけでエンジン付きの二十トン級の船作ったっていうことは。
（島田）奥のムラおこしはね南洋文化ですよ。例えば一つの話をしましょうね。くじら船に救出されたジョン万次郎の故郷、土佐出身の中山という言う人が南方で船会社をもってたわけ。この人のトゥジ（妻）が伊是名の人だということで、奥丸建造の時はその人を船大工にお願いしたんです。その人は木で船を作る仕事、そして親順さんは機械の仕事、分担してね、そういうようなチームワークで戦後の奥ができたわけです。奥だけの知恵じゃなくて、こういう南方の精神なんです。そして辺土上原といってちょっとした通訳みたいな人が奥から出てたわけです。南洋というのは国際的な島だから、そこの出身は片言の英語がわかるわけです。奥の人はＡＢＣもわからんし聞いたこともないけど。終戦後の奥文化というのは、そういう南洋帰りの先輩方が国際化という一つの感覚もっていたから、機械、船作り、言葉というところで発展してったわけです。
（能彦）戦前のほうがスケールが大きいですよね。
（島田）戦前、戦時中、終戦直後のほうがスケール大きい。今の人たちに言っても笑うだけの話です。
（能彦）沖縄全体が小さくなっちゃった感じがします。是非、親順さんには『自分史』をつくってほしいです。協力できることがあれば是非協力させてください。今日はどうもありがとうございました。